

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03036

研究課題名(和文) ウイグル族・朝鮮族・チワン族の文化大革命に関する実証研究

研究課題名(英文) Cultural Revolution in Xinjiang and Guangxi, Yanbian Korean Autonomous Region

研究代表者

大野 旭(楊海英)(Ohno(Yang), Akira(Haiying))

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：40278651

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は社会主義中国が域内の辺境地域に住むウイグル人と朝鮮人、それにチワン(壮)人に対して行った政治的弾圧の実態を究明しようとするものである。具体的には1966年から発動された文化大革命期間中の歴史に注目し、少数民族地帯で何が起こり、どのような善後政策が導入され、民族政策に如何なる影響を与えたのか、といった課題を掲げている。調査研究の結果、新疆ウイグル自治区ではウイグル人とソ連との連動に警戒し、過去に発生したウイグル人の民族自決運動が再清算の対象とされた。朝鮮族自治州でも半島との歴史的関係と人的交流が疑われた。チワン族社会では漢民族による暴力が横行していた事実が解明された。

研究成果の概要(英文)：This research aims to investigate the actual situation of political repression done by socialist China against the minority of Uighurs in Xinjiang, Koreans, and Zhuang people living in the front areas. Specifically, I focused on the period during the Cultural Revolution that since 1966, and it raises the issue of what happened in ethnic=National minorities, what kind of good-after policy was introduced, and how it affected ethnic=National policy. As a result, China was wary of the linkage between Uighurs and the Soviet Union in the Xinjiang Uygur Autonomous Region, so the Uighur self-determination movements that occurred in the past were subject to re-liquidation. The Chinese government suspected historical relations and human exchanges with the Peninsula even in the Korean autonomous province(Yanbian). In the Zhuang community, the fact that the violence by the Han=Chinese people was rampant was elucidated.

研究分野：文化人類学

キーワード：ウイグル人 チワン人 壮族 朝鮮族 文化大革命 民族問題 大量虐殺 食人

1. 研究開始当初の背景

中国文化大革命(以下「文革」と略記す)は「二〇世紀十大歴史的イベント」の一つに選ばれた、世界史的な出来事である。欧米は中国の文革に高い関心を寄せるが、あいかわらず主として北京など大都市部における権力闘争に注目している(マクファーサー他著『毛沢東:最後の革命』上・下、2010年)。この点は文革の老家、中国においても基本的に同じである(楊海英「書評・『天津の文化大革命』」『産経新聞』、2013年7月7日)。しかし、近年における世界規模での研究の深化に伴い、権力の中枢部北京での政治闘争と社会主義国家との制度的な関連だけでなく、巻きこまれた大衆側の動向、それも特に非漢民族側の文革参加の実態について詳細な実証研究の確立が求められている。中国内地の漢民族地域と異なり、辺境地帯は国境を越えて国際社会とつながっていたので、フロンティアへの文革の波及は中国と国際社会との関係を緊張させた。民族間・国家間の緊迫をもたらすだけでなく、民族問題や領土問題に発展して今日にまでつづいているのが、周知の事実である。

本研究の代表者・大野旭(楊海英)は上述の研究上の空白を埋めるべくして、現在までに中国北部における文革の実態究明に取りこんできた。まず、寧夏回族自治区でイスラームを信奉するムスリムたちが養豚を強いられ、イスラーム寺院が破壊されて「無神論」への誘導が強制された事実を記録した(楊海英『モンゴルとイスラーム的中国』、2007年)。つづいて内モンゴル自治区において1967~1976年の間に発生した大量虐殺事件の全容究明に全力を注いだ。その結果、『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』(上・下、2009年)と『続・墓標なき草原』(2011年)を岩波書店から刊行した。また、現地から収集した膨大な文献類を『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資

料—内モンゴル自治区の文化大革命』という史料集として計10冊、風響社から刊行している。いずれも世界で初めて公開する公的な史料で、各国の研究者らが利用できるよう努めてきた。

代表者の大野旭(楊海英)はまたチベット自治区における文革の発動に注目し、調査を進めると同時に、アメリカの文化人類学者ゴールドスタインの民族誌『チベットの文化大革命』を2012年に監訳・解説して風響社から公開した。つづいて雲南省に赴き、南部の沙甸村に1972年に発生したムスリム虐殺事件について調べ、「沙甸村の殉教者記念碑」(『中国21』Vol.37、愛知大学現代中国学会、2012年12月)を公表した。こうした一連の実証研究の推進により、イスラーム系諸民族とモンゴル、それにチベット人と中国社会との相克の一端が明らかになった。

本研究は代表者の従前の研究を更に発展させるプロジェクトである。それは、未踏査の辺境は西北の新疆ウイグル自治区と東北は旧満洲の延辺、それに南部の広西である。西北新疆のウイグル人と東北の朝鮮族、それに南部広西のチワン族がどのように首都北京からの文革に巻きこまれたのか。彼らの故郷でどのような「造反革命」が発動されたのか。国際共産主義の中心地を自認していた北京は如何に辺境を超越して周辺諸国に「革命思想を輸出」していったのか。国境を挟んで激化した民族問題と領土紛争の原因はどこにあるのか。かくのごとき困難な課題に迫る。

2. 研究の目的

既往の研究状況を概観すれば、中国人すなわち漢民族の文化大革命に関する成果は汗牛充棟の様相を呈しているが、少数民族が住む辺境地帯での展開についての研究は空白として残っていることが分かる。本研究は新疆ウイグル自治区と東北延辺朝鮮族自治州、それに広西チワン族自治区において、文化大

革命がくりひろげられたプロセスを詳細に再構築し、その実態を明らかにすることを目的としている。少数民族の視点に立って「マイノリティ対中国人(漢民族)」を軸に、国境を跨って居住する「跨境民族」との関係にも注視し、国際関係の中の文化大革命について再検討する。辺境における文化大革命の発動と影響は今日の民族問題や領土紛争の激化に直結している。少数民族の文化大革命を究明することで、民族問題の未然防止につながり、人間の安全保障にも寄与するためである。

3. 研究の方法

本研究は現地調査と文献分析を中心に、3年計画で遂行されてきた。まず初年度には新疆ウイグル自治区を故郷とするウイグル人を対象にインタビューを実施し、関連する文献を公開した(楊海英「ウイグル人の中国文化大革命—既往研究と批判資料からウイグル人の存在を抽出する試み」、2016年)。その結果、ソ連に淵源する共産主義・民族主義思想が東遷して、中国流社会主義思想・中華思想と相克し、ウイグル人による分離独立運動に対する中国の政治的弾圧が文革中に激化した事実が究明された。そうした後遺症の一つとして、ウイグル人は国外へ脱出し、今日の民族問題の再燃につながっている点も明らかになった。

二年目には東北部の延辺朝鮮族自治州を対象とした。毛沢東ファミリーによる東北満洲での直接統治の結果、朝鮮族エリートは弾圧され、そして文革中の肅清事件へと発展していった。代表者は韓国に移住した延辺朝鮮族自治州出身者から証言を聞き取りし、資料を収集した。

最終年度には中国南部の広西チワン族自治区の文革を取り上げた。香港と台湾に向向いて当事者から証言と文献を集めることができた。具体的には「文化大革命の展開と食人運動」を軸に聞き書き調査をおこなった。

4. 研究成果

以上のような計三年計画の遂行により、代表者が今までに全力を注いできた「少数民族の文化大革命研究」の集大成が実現しつつある。また、激しさを増しつつある中国の民族問題の性質を解析し、高まりを見せるナショナリズムの研究にも寄与できた。

まず、本研究の推進により、今まで代表者が持続的に構築してきた中国辺境少数民族地域における文革の全容が初めて体系的に究明されつつある。中国の五大少数民族自治区における文革研究の全容解明を目指す試みは、世界的に他に例のないアプローチである。今後は「二〇世紀十大歴史的イベント」の一つたる文革の性質を世界史と国際関係の脈絡の中で解明できよう。

次に、現代中国の動向、とくに周辺諸国を巻きこんだその民族問題は今や世界的な課題となりつつある。代表者は中国の民族問題の性質を文革に淵源し、「対外的には遅れてきた帝国主義国家」で、「対内的には諸民族に植民地体制をしく中国」と指摘している(楊海英著『フロンティアと国際社会の中国文化大革命』、2016年、集広舎)。中国が日本を含む周辺諸国との間で抱える領土紛争と民族問題(ベトナムとの領土紛争・ウイグル民族問題・中朝関係)は例外なく文革と連動していることが判明した。文革期における辺境地帯の民族問題への対処と国境を越えた革命活動について実証的に検討することにより、国際社会が共通して抱える民族問題と領土紛争の解決に学術の面で寄与できる、と成果を発信しつつける予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7件)

- 1.楊海英「王昭君をめぐる中国人の苦悩—観光資源における歴史の政治利用の一例」静岡大学人文社会科学部アジア研究センター『アジア研究』第13号,2018年,99-108頁。査読無。
- 2.楊海英「中国が政治利用するチンギス・ハーン—〈中華民族の英雄〉と資源化するモンゴルの歴史と文化」塚田誠之・河合洋尚編『中国における歴史の資源化の現状と課題』国立民族学博物館調査報告142,2017年,179-193頁。査読有。
- 3.楊海英「文化大革命—毛沢東世界派遣の野望」『文藝春秋』(Special, 2017年秋号), 2017年,160-165頁。査読無。
- 4.楊海英「日本は文化大革命五〇周年をどう論じたか」『中央公論』12月号,2016年,158-168頁。査読無。
- 5.楊海英「烏蘭夫與毛沢東的相克—大量屠殺蒙古人の理論背景」宋永毅編『文革五十年—毛沢東遺産和当代中国』(上),2016年,230-254頁,香港明鏡出版社。査読有。
- 6.楊海英「少数民族の中国文化大革命」一般財団法人・霞山会『東亜』(No.588,6月号),2016年,28-36頁。査読無。
- 7.楊海英「内モンゴルの中国文化大革命研究の現代史的意義」岩波書店『思想』(no.1101),2016年,72-90頁。査読無。

〔学会発表〕(計 7件)

- 1.楊海英「王昭君は民族団結のシンボルか」静岡大学人文社会科学部・アジア研究センター・大阪成蹊短期大学観光学科共同主催国際シンポジウム「東アジアの観光動態に関する学際的研究」, 2017年,於 静岡大学。
- 2.Akira Ohno(Yang Haiyin) “Mongolian Genocide During the Chinese Cultural revolution”, in 80th anniversary of political victims commemoration, Ulaanbaatar, 2017年。
- 3.楊海英「モンゴル人の中国文化大革命と

- 不名誉な〈名誉回復〉」日本文化人類学会第51回研究大会, 2017年,於:神戸大学。
- 4.楊海英「文化大革命研究の新方法・新発見—50周年からの再スタート」(静岡大学アジア研究センター・学習院女子大学国際学研究所共催), 2016年,於:学習院女子大学。
 5. Akira Ohno(Yang Haiyin) “Mongolian Genocide During the Chinese Cultural revolution”, International Association for Mongol Studies, in Ulaanbaatar, 2016年。
 - 6.楊海英「烏蘭夫與毛沢東的相克」, “China and Mao’s Legacy: Commemoration of the 50th Anniversary of the Cultural Revolution”, The University of California, Riverside, U.S.A, 2016年。
 - 7.楊海英「ウーランフーと毛沢東の相克」慶応義塾大学東アジア研究所・現代中国研究センター国際シンポジウム「毛沢東主義—半世紀後の視点」, 2015年,於 慶応義塾大学。

〔図書〕(計 9件)

1. 楊海英『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 10—紅衛兵新聞(二)』(内モンゴルの文化大革命 10),1-956頁,風響社,2018年。(編著)。
2. 楊海英『「中国」という神話—習近平「偉大な中華民族」のウソ』文春新書,1-240頁,2018年。(単著)。
3. 楊海英『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 9—紅衛兵新聞(一)』(内モンゴルの文化大革命 9),1-956頁,風響社,2017年。(編著)。
4. 楊海英『モンゴル人の民族自決と「対日協力」—いまなお続く中国文化大革命』,1-386頁,集広舎,2016年。(単著)。
5. 楊海英『逆転の大中国史—ユーラシアの視点から』,1-309頁,文藝春秋,2016年。(単著)。
6. 楊海英『フロンティアと国際社会の中国

文化大革命—いまなお中国と国際社会を呪縛する 50 年前の歴史』,1-301 頁,集広舎,2016 年。(編著)。

7. 楊海英『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 8—反右派闘争から文化大革命へ』(内モンゴルの文化大革命 8),1-956 頁,風響社,2016 年。(編著)。

8. 楊海英『中国文化大革命と国際社会—50 年後の省察と展望』(静岡大学人文社会科学部・国際シンポジウム論文集,『アジア研究・別冊 4』),1-242 頁,静岡大学人文社会科学部・アジア研究センター,2016 年。(編著)。

9. 楊海英『日本陸軍とモンゴル—興安軍官学校の知られざる戦い』,1-263 頁,中公新書,2015 年。(単著)。

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

大野 旭 (楊海英)(OHNO(YANG), Akira(Haiying))

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号: 40278651